

紀年銘箱書と 阿蘭陀焼 資料紹介 01 ～松浦コレクションから～

● 武部真木・堀木真美子

「阿蘭陀焼」とは、長崎出島へオランダ船（連合オランダ東インド会社）が運んできたやきものをいう総称名詞である。日本で古美術品として扱われているプリントウェアは1800年～1860年頃の鎖国期に伝来したもので、出土資料には18世紀末～1870年頃に製作されたものが多い。これらは欧州で普及品として量産された製品であったが、伝来した日本では茶器として高く評価されたこともあり、今日まで所蔵されてきた資料も数多く存在する。

紀年銘箱書をもつ資料（個人蔵）に接する機会に恵まれたことで、考古学資料との比較を目的とした資料調査・分析を行うことができた。今回の資料群にはイギリス（アダムス／W. ブラウンフィールド）とオランダ（ペトゥルス・レグー）の製作窯の製品が含まれ、箱単位で一見組物とみられる同一文様のプリントであっても、素地の形状や刻印などでは差異が抽出された。

1. はじめに

愛知県陶磁資料館にて2011年に開催された企画展『阿蘭陀焼 憧れのプリントウェア—海を渡ったヨーロッパ陶磁』では、「京阿蘭陀」とも呼ばれた京焼系の阿蘭陀写（おらんだうつし）、幕末に銅版転写による絵付を行った川名（かわな）焼（名古屋市）、里泉（りせん）焼（岐阜県瑞浪市）など色濃くその影響を受けた資料群と共に展示されていた。阿蘭陀焼とは「長崎出島へオランダ船（連合オランダ東インド会社）が運んできたやきもの」を指し、「狭義の生産地域を意味するものではなく」「広い意味で総称名詞的に用いられている」（仲野2011）とされる。

鎖国期の文政頃から明治5年頃にかけて、オランダ商館の商館員を通じてイギリス製、オランダ製、ベルギー製の陶磁器が日本国内に大量に輸入されたと推定され（岡1993）、遺跡調査においては出島遺跡、長崎市域をはじめ京都、大坂、江戸など都市部の武家屋敷や蔵屋敷、公家屋敷でみられるほか、オランダ商館長の江戸参府の際に設けられた阿蘭陀宿などに関連して伝えられている資料が知られている。

こうした陶磁器類は、例えば名古屋城や城下周辺のこれまでの調査では十分に検討されたとはいえず、その存在については不明瞭となっている。近年、城郭域も含む発掘調査が一部で継

続的に行われており、近代を含む出土遺物にも対応する環境が準備されつつある。

本稿では遺跡出土品との比較が可能となるよう基礎的な情報を整理することを目的とし、まずは紀年銘箱書をもつ資料を取り上げた。原則として箱単位での現時点のセット関係をそのまま提示し、加えて計測が可能な場合については釉薬等の蛍光X線分析を行い、箱単位の組合せを優先しつつ個体のデータの比較・検討を試みることにする。

2. 紀年銘箱書をもつ資料から

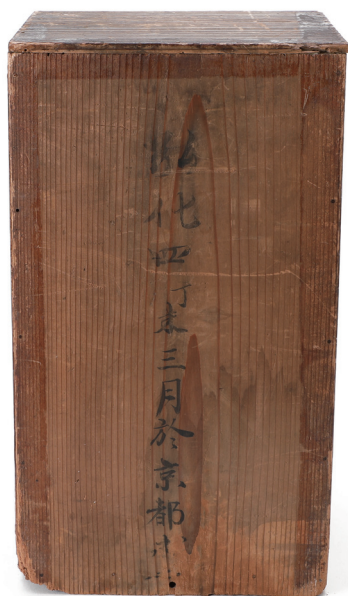
（1）資料01（図1）

収納木箱の寸法は高さ37cm、幅21cm、奥行21cmである。前面が嵌め込み式の蓋となっており、仕切板により皿10枚が収納可能である。箱書は、前面蓋に墨書で「二十人前之内」「阿蘭陀色繪 手引皿 十人前」「東 竹川」とあり、箱の背面にも墨書で「弘化四 丁未 三月於京都求之」とある。（弘化四年：1847年）

収納されているのは硬質陶器の手描色絵平皿8枚である。1は径（稜の位置）19.4cm、器高2.3cm、高台径は11.4cmである。2は径（稜の位置）19.4cm、器高2.3cm、高台径は12.0cmである。目跡は内面に3ヶ所、外面は高台の外側に3点1組のものが3ヶ所みられる。口縁端部には等間隔で稜があり（14稜）、内面



正面蓋 箱書



箱背面

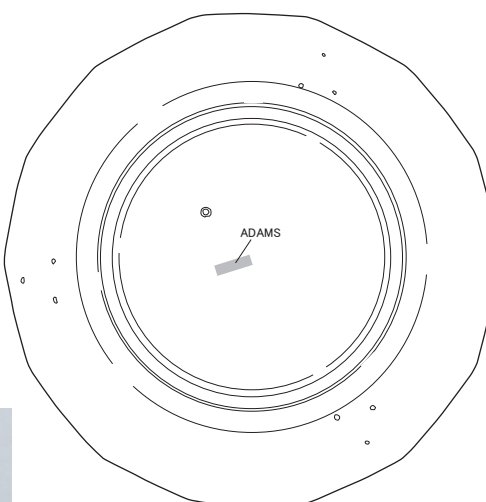
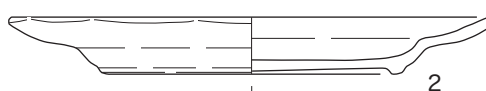
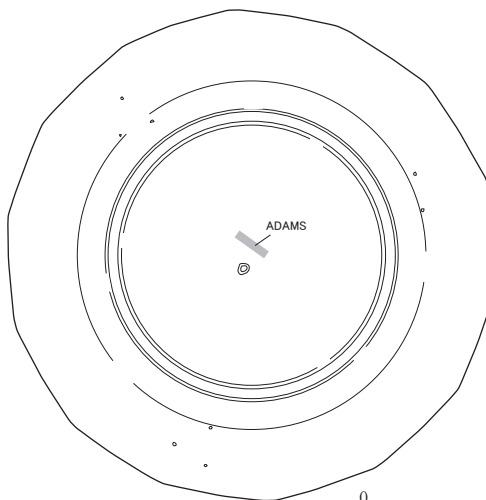
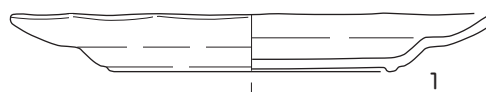


図1 資料 01 弘化四（1847）年箱書と色絵平皿（実測図縮尺 1/3）

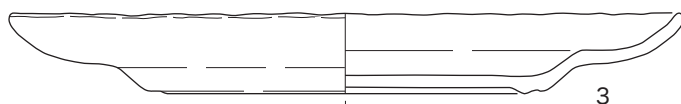
【資料 02】箱書紀年銘「嘉永元年」（1848 年）



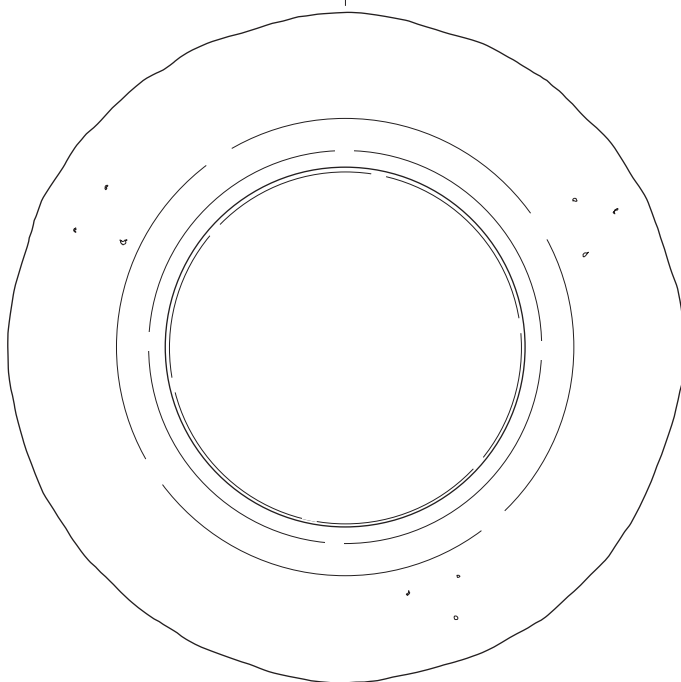
正面蓋 箱書



蓋背面



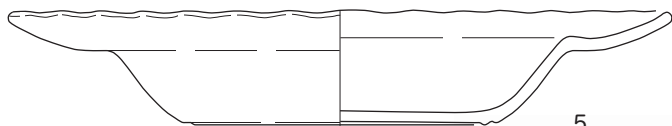
3



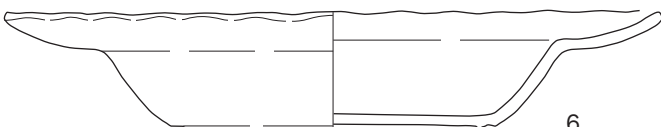
4



図2 資料 02 嘉永元（1848）年箱書とプリントウェア（その 1）（実測図縮尺 1/3）



5



6

図3 資料02 嘉永元（1848）年箱書とプリントウェア（その2）（実測図縮尺1/3）

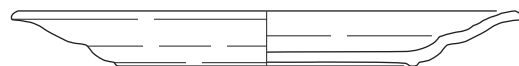
【資料 03】箱書紀年銘「慶応元」（1865 年）



上面蓋 箱書



箱側面



7

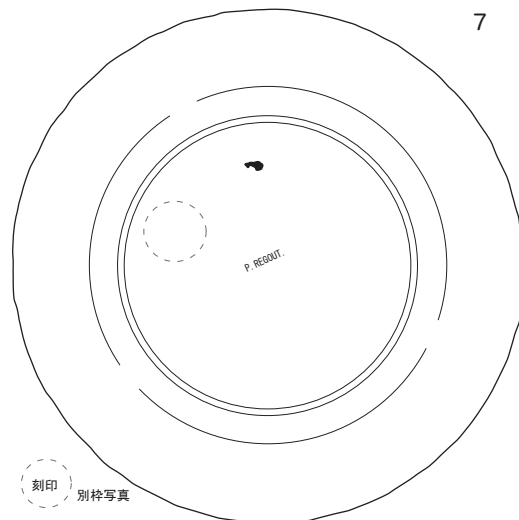


図4 資料 03 慶応元（1865）年箱書とプリントウェア（その 1）（実測図縮尺 1/3）

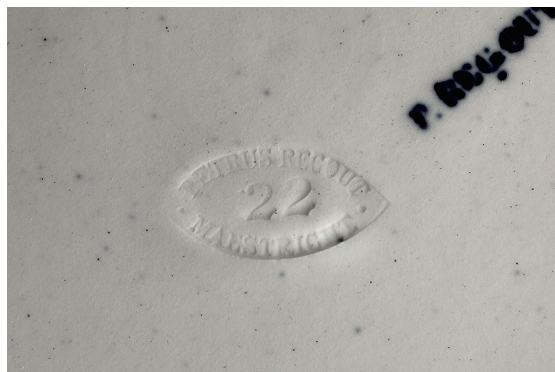
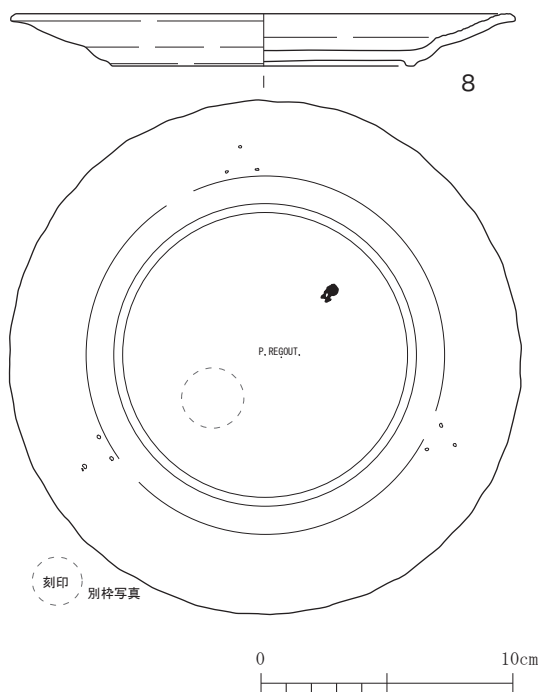


図5 資料03 慶応元（1865）年箱書と
プリントウェア（その2）（実測図縮尺1/3）

の透明釉の下に赤色で花卉、緑色で葉、濃紺色で蔓（枝）を描く。文様は口縁端部に赤色で圏線、周縁に4対の草花文、見込に若葉（？）を描く。外面は白色無文であり、高台内に「ADAMS」（英アダムス）の刻印マーク（Impressed mark）が押されている。

内面の文様および外面の印、白色無地部分の色調などは同一で違いが認められないが、高台径が異なり2グループに分けられる（11.4cm前後が3点、12.0cm前後が5点）。

参考例1「色絵花文皿」径24cm、高さ4.1cm。1847年以前、オランダペトウルス・レグラー窯。（弘化四年箱書『神戸市博物館館蔵品目録 美術の部20 外国製陶磁器』）参考例2伝世品に径26.6cmの皿があり、これと同一品が肥後細川藩家老で八代城主であった松井家所蔵品にみられるという。（永松,1993）

（2）資料02（図2・3）

収納木箱の寸法は、高さ25cm、幅29.2cm、奥行30cmである。前面が引き上げ式の蓋となっており、蓋に墨書で「蘭陀焼四対入 嘉永元年 甲 十月新調」とある。（嘉永元年：1848年）収納されているのは藍絵プリントウェア平皿2枚（3・4）と深皿2枚（5・6）の計4点である。3の文様は藍絵西洋風景画で内面表面は広く剥離している。径26.8cm、器高3.2cm、高台径14.2cm。4は藍絵西洋風景画で径26.4cm、器高3.0cm、高台径14.4cm。5は藍絵西洋風景画で径26.2cm、器高4.6cm、高台径10.4cm。外面は白色で高台外に転写マーク「IMPROVED STONEWARE Screen Border WB Co」（英W. ブラウンフィールド）がある。6は藍絵西洋風景画 径26.0cm、器高4.7cm、高台径10.4cm。外面は白色無地である。

平皿2枚の文様パターンは同文である。4点の資料全て目跡は内面に3ヶ所、外面は高台外側に3点1組のものが3ヶ所に認められ、口縁端部は平縁ではなく大小交互の凹みからなる輪花状となっている。

5に関する参考例赤絵西洋風景画（パターン名：スクリーンボーダー）径26.3cm、器高4.8cm、高台径11.5cm、同様の外面転写マークあり。19世紀後半とされる。（愛知県陶磁資料館,2011,出品目録No.64）

(3) 資料03 (図4・5)

収納木箱の寸法は、高さ16cm、幅22.3cm、奥行44cmである。上面が蓋、内側中央の仕切りで空間が二等分されている。蓋の墨書は長辺向き縦書きで、「おらんだ舶来 中村又左衛門 焼物皿貳拾人前 慶応元年七月改」、短辺側面には「□木村 大皿貳拾人 羽根」とある。(慶応元年：1865年)

収納されている資料は、藍絵プリントウェア平皿15枚である。文様は背中に瘤のある人物を含む挿絵ふうの風俗画であり、画面の上・下部にそれぞれ2行のオランダ語テキストが挿入されている。繊細な表現は少なくオランダ人向け製品とすれば、銅版転写の原版の段階からオランダで製作されたものであろうか。

7は径20.2cm、器高2.2cm、高台径11.6cm、8は径20.2cm、器高2.0cm、高台径12.0cmである。目跡は、内面に3ヶ所、外面は高台外側に3点1組のものが3ヶ所認められる。ただし15枚のうち図化資料7のみ、外面に確認できなかった。窯詰の際の最上段に置かれた個体と推定される。内面の周縁部分は白地であり、10弁の花文の浮彫りが周囲をめぐる。外側から大・中・小の3種類のサイズの花文レリーフが取り巻く構成となっている。

皿内面にプリントされた文様パターンは全て同じで1種類であるが、外面高台内に押された刻印マークの形状には2種類がある(内訳は7のタイプが9点、8のタイプが6点)。7では(モチーフ不明の)ある形状の枠の下方に「P.REGOUT」、その下に接する長方形枠の中に「MAASTRICHT」、その下にアラビア数字「6」の文字陰刻が入る。8では木葉形の枠内中央にアラビア数字「22」、その上部に「・PETRUS REGOUT・」、下部に「MAASTRICHT」の文字陰刻が入る^{*}。

7と8では器高や高台径など形状にも違いがあり、白色無地部分は7の方が(釉溜りも含めて)やや青みが強く、比べて8はそれより黄色みを帯びた色調である。皿の周縁端部の調整にも粗雑の違いが認められ、8の方が滑らかに仕上げ

られている。以上により両者の素地は同時に製作されたものでない可能性が高いと考えられる。(武部)

3. 釉薬の蛍光X線分析

(1) 分析方法と装置

測定は、それぞれの資料で色調の異なる部分を、それぞれ3ポイントずつにX線を照射する方法で行った。資料の表面について、削るなどの表面調整は行っていない。測定機器は(株)堀場製作所製XGT-5000。測定条件はX線管電圧30kV、測定時間500秒、照射径100 μ m、雰囲気は大気である。

(2) 分析結果

測定結果を表1に示す。測定の結果、Al(アルミニウム)、Si(ケイ素)、P(リン)、K(カリウム)、Ca(カルシウム)、Ti(チタン)、Cr(クロム)、Mn(マンガン)、Fe(鉄)、Ni(ニッケル)、Zn(亜鉛)、Co(コバルト)、Cu(銅)、As(ヒ素)、Pb(鉛)の15元素が確認された。以下、各資料毎の特徴を述べる。

資料01 (1) (分析番号212-5)

1は、赤色、緑色、黒色で草花文が描かれているものである。これらのうち、赤色3ポイント、緑色2ポイント、白色(透明部分)3ポイントの合計8ポイントにおいて測定を実施。すべての個所で確認された元素は、Al、Si、K、Ca、Fe、Cu、Pbの7元素であった。白色部分で3ポイントすべてにおいてMnとTiが確認された。赤色部分でCoの小さなピークを確認した。

資料01 (2) (分析番号212-1)

1と同様の図柄を持つ資料である。すべての個所で確認された元素は、Al、Si、K、Ca、Fe、Cu、Pbの7元素。白色部分3か所でTiとMnが、緑色部分2か所でCrとZnが、赤色部分3か所でCrがそれぞれ確認された。

資料02 (3) (分析番号107b)

青色の絵柄がプリントされた資料である。すべてのポイントで確認された元素は、Al、Si、K、Ca、Fe、Cu、Pbの7元素。白色部分3か所の

^{*} これとやや異なる枠形状の刻印がよく知られている。「P.REGOUT MAASTRICHT」の文字を長円の中におさめたものは、1850年代から1880年代までまん中に数字を入れて使われており、数字でなく文字がはいっているものも1870年代に使われた。(岡,1993)。

表 1 各資料で認められた元素

資料番号	図番号	分析番号	色調	確認された元素											
資料01	1	212-5W	白	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe		Cu	Pb		
		212-5G	緑	Al	Si	K	Ca			Fe		Cu	Pb		
		212-5R	赤	Al	Si	K	Ca			Fe	(Co)	Cu	Pb		
	2	212-1W	白	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe		Cu	Pb		
		212-1G	緑	Al	Si	K	Ca	Cr		Fe		Cu	Zn Pb		
		212-1R	赤	Al	Si	K	Ca	Cr		Fe		Cu	Pb		
資料02	3	107b-W	白	Al	Si (P)	K	Ca			Fe	(Co)	Cu	Pb		
		107b-B	青	Al	Si	K	Ca	Ti		Fe	Ni	Co	Cu	As	Pb
	4	107a-W	白	Al	Si P	K	Ca	Ti		Fe		Cu	Pb		
		107a-B	青	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Ni	Co	Cu	As	Pb
	5	107c-W	白	Al	Si	K	Ca (Ti)	(Mn)	Fe		Cu	Pb			
		107c-B	青	Al	Si	K	Ca (Ti)	Mn	Fe		Co	Cu	Pb		
	6	107d-W	白	Al	Si	K	Ca	Ti		Fe		Cu	Pb		
		107d-B	青	Al	Si	K	Ca (Ti)		Fe		Co	Cu	Pb		
	資料03	7	179B2-W	白	Al	Si	K	Ca	Ti		Fe		Co	Cu	Pb
			179B2-B	青	Al	Si	K	Ca	Ti		Fe	Ni	Co	Cu	Pb
		179B1-W	白	Al	Si	K	Ca	Ti		Fe		Co	Cu	Pb	
		179B1-B	青	Al	Si	K	Ca	Ti		Fe	Ni	Co	Cu	Pb	
8		179A2-W	白	Al	Si (P)	K	Ca	Ti		Fe		Cu	Pb		
		179A2-B	青	Al	Si	K	Ca	Ti		Fe	Ni	Co	Cu	Pb	
		179A1-W	白	Al	Si	K	Ca	Ti		Fe		Cu	Pb		
		179A1-B	青	Al	Si	K	Ca	Ti		Fe	Ni	Co	Cu	Pb	

* 各色調の個所を3か所づつ測定。

* () は、3か所の測定点で、確認されない箇所があったことを示す。

うち1か所からPとCoが確認された。青色部分3か所でNiとAsが確認された。

資料02(4)(分析番号107a)

青色の絵柄がプリントされた資料である。白色部分3か所と青色部分3か所の測定を行い、すべての個所で、Al、Si、K、Ca、Ti、Fe、Cu、Pbの8元素を確認した。白色部分ではPが、青色部分ではMn、Ni、Co、Asが確認された。

資料02(5)(分析番号107c)

青色の絵柄が描かれている資料である。白色部分3か所と青色部分3か所のすべての個所で確認された元素は、Al、Si、K、Ca、Fe、Cu、Pbの7元素である。白色部分でTiとMnが確認されるポイントがあった。また青色部分では、すべてのポイントでMnとCoが、一つのポイントでTiが確認された。

資料02(6)(分析番号107d)

青色の絵柄がプリントされた資料である。白色部分3か所と青色部分3か所の測定を実施。すべての測定点で確認された元素は、Al、Si、K、

Ca、Fe、Cu、Pbの7元素。白色部分ではTiがすべてのポイントで確認されたが、青色部分では1ポイントのみであった。また青色部分ではCoが確認されている。

資料03(7、および同タイプ)(分析番号179B2・179B1)

青色の絵柄がプリントされた資料である。同じ刻印をもつ皿から2枚を抽出し測定を行った。それぞれの測定個所は、外側底面の中央付近で、白色部分3か所と青色部分3か所である。すべての個所で確認された元素は、Al、Si、K、Ca、Ti、Fe、Co、Cu、Pbの9元素。青色部分ではNiがすべてのポイントで確認された。

資料03(8、および同タイプ)(分析番号179A2・179A1)

青色の絵柄がプリントされた資料である。7と同様に2枚を抽出して測定した。測定個所は、皿の外部の底面。それぞれ白色部分3か所、青色部分3か所を測定した。すべての個所で確認されたのは、Al、Si、K、Ca、Ti、Fe、Cu、Pb

表2 FP法による成分比

青色部分														
	図番号	分析番号	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO ₂	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	PbO	total	
資料02	3	107b-B1	11	65	2	6	0	0	1	2	0	13	100	
		107b-B2	11	65	2	6	0	0	0	2	0	14	100	
		107b-B3	11	63	2	7	0	0	0	2	0	15	100	
	4	107a-B1	11	64	2	6	0	0	0	2	0	14	100	
		107a-B2	11	65	2	6	0	0	0	2	0	14	100	
		107a-B3	11	63	2	7	0	0	1	1	0	15	100	
	5	107c-B1	10	69	2	10	0	0	0	2	0	6	100	
		107c-B2	10	73	2	7	0	0	0	2	0	6	100	
		107c-B3	9	75	2	6	0	0	0	2	0	6	100	
	6	107d-B1	8	75	2	5	0	0	0	1	0	9	100	
		107d-B2	8	75	2	5	0	0	0	1	0	9	100	
		107d-B3	10	69	2	9	0	0	0	2	0	9	100	
資料03	7	179B2-B1	12	71	2	5	0	0	0	2	0	8	100	
		179B2-B2	12	69	2	5	0	0	0	3	0	9	100	
		179B2-B3	11	70	2	5	0	0	0	2	0	9	100	
		179B1-B1	11	70	2	5	0	0	0	3	0	8	100	
		179B1-B2	9	71	2	6	0	0	0	3	0	8	99	
		179B1-B3	11	72	2	5	0	0	0	3	0	8	102	
	8	179A2-B1	12	68	2	5	0	0	0	4	0	9	100	
		179A2-B2	11	67	2	6	0	0	0	3	0	10	100	
		179A2-B3	11	70	2	5	0	0	0	2	0	9	100	
		179A1-B1	12	72	2	5	0	0	0	2	0	7	100	
		179A1-B2	11	71	2	6	0	0	0	3	0	7	100	
		179A1-B3	11	75	3	4	0	0	0	1	0	6	100	
白色部分														
	図番号	分析番号	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO ₂	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	PbO	total	
資料01	1	212-5W1	12	74	2	8	0	0	0	0	0	3	100	
		212-5W2	9	77	2	7	0	0	0	0	0	4	100	
		212-5W3	9	73	2	7	0	0	0	0	0	9	100	
	2	212-1W1	10	74	2	7	0	0	0	0	0	8	100	
		212-1W2	10	74	2	7	0	0	0	0	0	7	100	
		212-1W3	9	73	2	7	0	0	0	0	0	9	100	
資料02	3	107b-W1	8	71	2	4	0	0	0	0	0	14	100	
		107b-W2	9	71	3	3	0	0	0	0	0	14	100	
		107b-W3	8	66	3	7	0	0	0	0	0	15	100	
	4	107a-W1	11	67	2	6	0	0	0	0	0	14	100	
		107a-W2	10	67	2	5	0	0	0	0	0	15	100	
		107a-W3	12	68	2	6	0	0	0	0	0	11	100	
	5	107c-W1	12	76	2	6	0	0	0	0	0	0	3	100
		107c-W2	11	79	2	5	0	0	0	0	0	0	2	100
		107c-W3	9	76	2	7	0	0	0	0	0	0	7	100
	6	107d-W1	11	71	2	8	0	0	0	0	0	0	8	100
		107d-W2	11	74	2	7	0	0	0	0	0	0	7	100
		107d-W3	10	76	2	6	0	0	0	0	0	0	7	100
資料03	7	179B2-W1	11	77	3	4	0	0	0	0	0	5	100	
		179B2-W2	11	76	3	4	0	0	0	0	0	6	100	
		179B2-W3	11	76	3	4	0	0	0	0	0	6	100	
		179B1-W1	10	77	3	4	0	0	0	0	0	0	5	99
		179B1-W2	10	78	3	4	0	0	0	0	0	0	5	100
		179B1-W3	11	77	3	4	0	0	0	0	0	0	5	100
	8	179A2-W1	12	75	3	4	0	0	0	0	0	0	5	100
		179A2-W2	11	77	3	4	0	0	0	0	0	0	5	100
		179A2-W3	11	77	3	4	0	0	0	0	0	0	5	100
		179A1-W1	11	77	3	4	0	0	0	0	0	0	5	100
		179A1-W2	11	77	3	4	0	0	0	0	0	0	5	100
		179A1-W3	11	77	3	4	0	0	0	0	0	0	5	100

の8元素。白色部分ではPが1ポイントで確認されたが、青色部分ではNiとCoがすべてのポイントで確認された。

(3) 青色染料の種類について

今回分析をおこなった資料10点のうち、青色部分からNi(ニッケル)が確認されたものは6点、As(ヒ素)が確認されたものが2点であった。当時のコバルト顔料がどこから調達されたものか、今回の分析結果から追求することはできない。しかし、NiとAsが含まれているものが確認できたことから、今後追及すること

ができるかもしれない。

コバルトの利用について、大規模に利用し始めたのは古代エジプトとされ、その原材料はエジプト国内で産する「コバルトミョウバン」であったとされる。また、その後の時代に製造されたガラス製品などに含まれるコバルトについては、古代から近世に至るまで、その供給地は特定されていない。その中で中世以降の主なコバルト原料とその産地は、イラン産のコバルト華(Asを含む鉱物)、インド産の輝コバルト鉱(Asを含む)、ドイツ産の輝コバルト鉱(銀や錫とともに産する)等が示されているが、ガラス製品の再利用等の問題があり、コバルトの供給経路は解明されていない(阿部2017)。

(4) 鉛の含有率について

今回分析をおこなった資料のスペクトルをもとに、ほぼすべての資料で共通する10元素(Al, Si, K, Ca, Ti, Mn, Fe, Co, Cu, Pb)に限定し、FP法(ファンダメンタルパラメータ法という機械的な計算方法)によって酸化物としての比率を算出した(表2)。これらの値は、FP法によるもので、決して真の組成値を示すものではない。しかし今回は同一条件下での比較を目的に数値化を行った。その結果、PbOの比率に大きな違いが現われた。資料02(3・4)においてPbOが14%程度の値を示している。他の資料がほぼ10%未満であることと比較して有意な差があるものとする。あわせてこれらの資料ではAs(ヒ素)が確認されるという特徴も確認できた。この様な違いの原因について、筆者らは言及する材料を持ち合わせていない。素材の違いか、作業場の差によるものか、製作時期の違いによるものなのか、分析事例をふやす事で追及できれば幸いである。(堀木)

4. まとめにかえて

ここで紀年銘箱書をもつ資料として取り上げた陶器皿は、ある段階にこの形に組物とされた資料群であり、箱書との関係からすぐさま製作年代を結びつけて考えられるという訳ではない。ただ少なくとも個々の器は、鎖国期の日本では茶器として高く評価され好まれた西洋の文物であり、紀年銘を付して「阿蘭陀」「おらんだ舶来」

「蘭陀焼」は大切に所蔵され今日に至っている。「うつわに加飾された（西洋の）絵画」と当時の画家に認識され、「プリントウェア流入の衝撃と愛好熱をうかがい知る証拠」（岡,2011）と評価される歴史資料であり、遺跡での出土情報は地点の性格や流通の実態を探る重要な手掛かりとなっている。

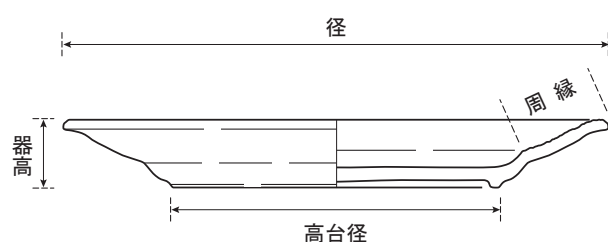
さて、今回箱単位での観察・分析により、一見揃いのセットのように思われた資料は、規格と文様が同様か、あるいは似通ったもので構成されている場合があることが明らかとなった。素地の検討と釉薬の分析においても、製作地あるいは製作時期が異なる可能性が指摘できそうである。天保期以降に増加の傾向がうかがわれるという箱書の年代にも留意しつつ、継続して資料の提示・情報の蓄積を進めていきたい。

（武部・堀木）

謝辞

本稿をまとめるにあたり、次の方々のご助言、ご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。

小澤一弘 松浦繁蔵 松浦節子 金子知久
蔭山誠一



引用・参考文献

- 永松 実 1993「発掘された食文化の洋風化について」『長崎出島の食文化』親和文庫第 17 号 親和銀行
- 岡 泰正 1993「オランダ・マーストリヒトにおけるレグウート窯について—江戸時代後期のオランダ陶器受容に関する基礎資料—」『長崎出島の食文化』親和文庫第 17 号 親和銀行
- 岡 泰正 2001「第 2 節 出島・護岸石垣出土のヨーロッパ製陶器について」『国指定史跡 出島和蘭商館跡—護岸石垣復元事業に伴う発掘調査及び工事報告書—』長崎市教育委員会
- 神戸市博物館 2004『神戸市博物館館蔵品目録 美術の部 20 外国製陶磁器』
- 岡 泰正 2010「第 6 章第 2 節 出島南側護岸石垣前面出土の西洋陶器について」『国指定史跡 出島和蘭商館跡—南側護岸石垣発掘調査・修復復元工事報告書—』長崎市教育委員会
- 岡 泰正 2011「プリントウェアの復権をめざして—日本におけるヨーロッパ転写陶器受容の意義—」『阿蘭陀焼 憧れのプリントウェア—海を渡ったヨーロッパ陶磁』
- 仲野泰裕 2011「阿蘭陀焼と日本陶磁 陶磁の東西交流」『阿蘭陀焼 憧れのプリントウェア—海を渡ったヨーロッパ陶磁』愛知県陶磁資料館
- 長久智子 2011「藍絵阿蘭陀写」『阿蘭陀焼 憧れのプリントウェア—海を渡ったヨーロッパ陶磁』愛知県陶磁資料館
- 阿部善也 2017「古代オリエント世界におけるコバルトの利用」『特別企画展染付・青繪の世界』愛知県陶磁美術館